

浪花の十二月

「大阪くらしの今昔館」が所蔵する、大坂生まれの浮世絵師・二代長谷川貞信(1848~1940)が描いた月ごとの大坂の行事と風景の画帖から、とくに見ごたえのある場面を紹介しします。

(二代長谷川貞信「浪花行事十二月」「浪花風景十二月」より)

7月 水無月
みなづき



名物天神まつり

「めいぶつてんじんまつり」

天神祭は大阪の夏を彩る大祭。天曆5年(951)に神針を流して、流れ着いたところを斎場とし心霊を禊したのがはじまりという。船渡御は、神輿が難波橋から船に乗り楽を奏して戎島の御旅所まで往復した。昭和28年(1953)からは大川を遡行する形に変更し、現在も続いている。

9月 紅葉月
もみじづき



重陽菊の使

「ちようようきくのかつかい」

重陽は9月9日「菊の節句」とも呼ばれる。菊は長寿をもたらし、強い香りで邪気を払うとされ、平安時代から宮中では菊を眺めて菊酒を飲む「菊花の宴」を行った。絵では菊が祝儀として町家に届けられ、これから、秋の収穫物を使った宴の準備がはじまるのだから。

8月 葉月
はづき



四ツ橋之夕涼

「よつばしのゆうすずみ」

西横堀川と長堀川の交わる位置に「ロ」の字型にかかる橋を四ツ橋と呼んだ。うちわを手にした人々が、向かいの橋上を通る布団太鼓の行列を見物しながら夕涼みをしている。右奥にピルのように見えているのは、なんと積みあげられた材木で、長堀川の両岸は材木濱と呼ばれた。

10月 時雨月
しぐれづき



誓文払

「せいもんばらい」

大阪の呉服屋では旧暦10月20日、現代で言うバーゲンセール「誓文払」を行った。仕立ての際に余ったはぎれを竿につるし、軒から通りに突き出して販売した。軒先で品定めをする子連れの女性と、道行く人に声をかける店主が描かれる。商家の風物詩である。